

真をみると、強い情熱を内に秘めたまぎれもない美青年でかつ秀才であったことが想像される。

若くして死んだ木下さんの業績は勿論そう多くはない。しかし、天文台勤務七年そのうち実際に働けたのは恐らく約5年か6年であろうことを考えると、2つの小惑星(東京十三番、東京十七番)の発見をはじめとして、学士院記事および天文台プレテンに観測報告と整約の小論文が10篇くらいある。そのうち半数は及川奥郎氏をリーダーとして、一年後輩の石井重雄氏と共に行った小惑星や彗星の写真観測で、ついで二年後輩の窪川一雄氏らと行った星食の観測が多い。ほかにも、悲劇の始り、1929年5月9日の皆既日食の報告(Tokyo Astronom. Bulletin No. 32, 1929)として木下、蓮沼左千男、白石通義の三氏の連名で書かれたものなどがある。この人たちは、熱帯の地で、雲のためよい観測ができなかったこの日食行での無理があるいは遠因となっていずれも夭逝されたのである。連星の反射効果で有名な京大の竹田新一郎氏も例外でなく、このため京都の天体物理は、電離平衡を解きコロナの百万度を証明した宮本正太郎先生が頭角をあらわすまで10年の歳月を必要としたのである。当時の日食観測は遠征という言葉がついたように、観測装置の運送、設営、引揚げ等に、精神的肉体的な多くの労苦を伴ったらしく、今日でいえば奥地の探険にいくくらいの困難を覚悟しなければいけなかったようである。木下さんのこの悲劇の日食にかけた意気込みはすくなく、その苦心談は天文月報に次々と日食観測行の記事を載せているが、手製のフラッシュスベクトル用の対物プリズムカメラや小コロナグラフ、ヒルガーのスペクトログラフなど一人三役の活躍をしたのであった。この日食に対する回想の多くは悲劇的であったが、全く明るい面がなかったわけではない。それは、沈馨先生(現在台湾大学教授(職位退休)、台北市在住)が上海から同行されたことである。日中天文学共同研究が当時も行なわれていたことを歴史的事実として付記しておきたい。

石井氏の追悼文によれば、署名はないけれども天文月報二十二巻の巻頭言新年のことは、木下さんの文であるという。ここにも日食に対する意気込みの一端が書かれてはいるが、京大の花山天文台の建設、塔望遠鏡に次ぐ二十六吋屈折望遠鏡の設置、国際報時無線報時比較完成、日本天文学会員数九百名到達など明るい展望にみちて居り、当時の日本天文学界に若い力による活気がみちていた様子がうかがわれる。木下さん個人については、これより少し前から天文台の仕事は仕事として、学問的興味はだんだんと天体物理の方面に傾いていったようである。「O型星について」、「バルマー線列」、「星の物理的状態」、「カルシウム雲」等なかなかの名論説であって、今日読んでみても結構批判にたえる内容と明解さを

もっている。特に最後の「カルシウム雲」(第二十一巻第十二号1928)は示唆に富んでおり、「筆者は嘗て此の問題(大きな速度の星間吸収線をもつ星があること)を調べた時にカルシウム雲が銀河平面に関し多少対称的に固有運動をして居ることを確め得た。……」と書かれている。後に電波観測からみつかったような高銀緯から銀河面に降ってくるような星間雲の固有運動と関係のあることを当時すでに見つけていたのかもしれない。東北大学の高窪啓弥教授は、かつて大学院生のころ石田、安田、守山の諸氏や私などと天文台に居候をしていたことがあったが、はからずも木下先輩の衣鉢をついだことになるようである。

悲劇の日食におもむいた人々、それに窪川一雄氏、矢崎信一氏ら当時の天文月報に天体物理関係の論説を書いた若手の多くはどのようなわけか若くしてなくなってしまっていて、私どもの世代になると全く面識がない。木下さんらももっと長命であつたら、日本の天文学の発展ももっと上がったものになっていたであろう。私ども天文屋はephemiris(暦)はお手のものであるし、宇宙の諸現象はすべて不変ではないことはよく知っているが、木下さんの“ephemeral”さについては、恐らく順二氏の思いとは別のものであろうが、やはり胸をうつものがある。壮大なる宇宙のドラマにあこがれ、業半ばにして多くの思いを残して死んだ天文学者のロマンがそこにみられるからである。正規の科学史にはのらない陰の天文学史として記録に止めたい気持である。

最後に、本稿をかくにあたり「本郷」を紹介し、天文月報の文献をしらべるなど多大の援助をしていただいた天文学教室の本木たい子氏に厚く感謝する。

学会だより

日本学術会議第13期会員の選出について

日本学術会議会員の選出方法が、学術研究者個人による選挙から、学協会による推薦方式に変わり、昭和58年11月に『日本学術会議法』が公布された。そして昭和59年5月29日付の政令で『日本学術会議法施行令』が改訂され、昭和60年7月19日からは新しく選出された会員によって、日本学術会議は運営されることになった。

施行令によると、会員総数は210名で以前と同数であるが、各部定数には変動があり、第4部定員は31名と規定されている。

日本天文学会は、昭和59年5月の総会で、「第13期会員推薦のための研究団体登録をする」ことを決定したので、付表の日程に従った推薦手続きを進めていかなければならない。天文に関わる研究連絡委員会(研連委)は、天文研連委であるが、当研連委から学術会議を通して推薦される会員候補者及び補欠の人数は、規則第9号

によってそれぞれ1名と決められている。そして日本天文学会は、学術会議から要請される人数の会員候補者及び推薦人を選定することになる。日程表によれば、その選定は昭和60年1月中旬以降で、2月28日までに届出でなければならない。

第13期会員選出手続日程表

(昭和59年7月12日現在)

日本学術会議広報委員会

年 月 日	手 続 等
昭59年 5月29日	日本学術会議法施行令閣議決定
6月19~21日	臨時総会(推薦手續関係規則及び内部組織関係規則等審議決定。)
6月29日	日本学術会議法施行令の一部を改正する政令閣議決定
7月10日	臨時総会(専門別定員, 研究連絡委員会関係規則等審議決定)
7月中旬	(会員推薦管理会発足)
9月29日	学術研究団体からの登録申請期限(受付締切)
10月	定例総会
10月~12月	学術研究団体の審査, 登録(異議申出審理)意見聴取
11月	学術研究団体へおよその推薦人数を通知
11月	(再編成後の研究連絡委員会発足)
昭60年 1月中旬	登録学術研究団体に対する会員候補者の選定依頼及び推薦人の指名依頼
2月中旬	定例部会
2月28日	登録学術研究団体からの会員候補者及び推薦人の届出期限(受付締切)
4月30日	会員候補者の資格の認定
4月	定例総会
5月中旬~6月上旬	推薦人による会員として推薦すべき者の選考, 決定
6月中旬	日本学術会議を経由しての内閣総理大臣に対する推薦
7月	内閣総理大臣による第13期会員の任命
"	臨時総会(役員選出等), 臨時部会
"	第13期研究連絡委員会の委員の委嘱

日本天文学会欧文研究報告 Invited Review 欄について

今回、日本天文学会欧文研究報告(PASJ)に Invited Review 欄を設けることができました。これは天文学及び関連分野のトピックについて世界における研究の最近の進展、或は広い影響を持つプロジェクトの結果、等を優れた視点からまとめたものとし、差し当たり年に2篇以内程度のペースで発足したいと思っております。トピック、著者について広く会員からの示唆を歓迎いたします。

(日本天文学会欧文研究報告編集長 内田 豊)



D. Reidel Publishing Company

新刊

PHYSICS OF THERMAL GASEOUS NEBULAE (PHYSICAL PROCESSES IN GASEOUS NEBULAE)

by
LAWRENCE H. ALLER, Professor
University of California, Department of Astronomy, Los Angeles,
California, USA

ASTROPHYSICS AND SPACE SCIENCE
LIBRARY 112

356 pp.
Cloth. ¥13,750 ISBN 90-277-1814-8
August 1984, D. Reidel Publishing Company

After a quick review of principal types of gaseous nebulae, this volume concentrates on basic spectroscopy and atomic processes pertinent to diagnostics of ionized nebular plasmas such as HII regions, planetary, wind-blown shells, and other ejecta. The presentation is intended for both the serious student and the research worker. Emphasis is placed on a comparison of observed and predicted spectra. Numerous diagrams, formulae, and tables based on the most recent information are featured so that ultraviolet, optical, infrared, and radiofrequency data can be employed to obtain electron densities, temperatures, ionic concentrations and ultimately chemical compositions for the emitting plasma. The role and challenges of theoretical nebular models, complications introduced by dust, and shock waves are discussed. Attention is focused on determination of chemical compositions of gaseous nebulae and the importance of these studies to late stages of stellar evolution and to investigations of chemical compositions of the local interstellar medium as well as to those of distant galaxies.

PROBLEMS OF COLLAPSE AND NUMERICAL RELATIVITY

Proceedings of the NATO Advanced Research
Workshop on Problems of Collapse and Numerical
Relativity, Toulouse, France, November 7-11, 1983

edited by
DANIEL BANCEL
Université Paul Sabatier, Toulouse, France
MONIQUE SIGNORE
Observatoire de Meudon, Meudon, France

NATO ADVANCED SCIENCE INSTITUTES SERIES
C: MATHEMATICAL AND PHYSICAL SCIENCES 134

416 pp.
Cloth: ¥15,950 ISBN 90-277-1816-4
August 1984, D. Reidel Publishing Company

The main purpose of this book is to give the present state on each problem involved at the end of massive stars: i) supernova explosions; ii) generation of gravitational waves; iii) final state of the collapse. The microphysical processes and the equation of state of hot nuclear matter are considered as well as the constraints they imply on dynamics. In this way both type-I and type-II supernovae are studied. Part of the book is devoted to numerical relativity: the different formalisms of general relativity are presented in order to follow both dynamics of matter and evolution of space-time through the entire collapse and to estimate gravitational waves emitted during collapse of a stellar core to a neutron star or black hole. Moreover, connected to the problem of collapse and the thermonuclear explosion processes, observations and models of X-ray bursts are presented and discussed.



Reidel 日本総代理店

株式会社

ニユートリノ

東京都港区赤坂8-4-7 カールビル
TEL (03)405-6137(代) 〒107